中村俊定文庫
文庫 18
760

かんぬふ

文化八　巣兆撰　柿莊遊善

志ふかく武士なれども雅実温厚なるのみ
ならず和歌にひろく千曲川の風流に通じ
詩哥連俳の長所をとりて今井社榊原
とあふぐ社さらに代々義仙寺門目代として
四門社光明通徳の社務職代々うしする
牡丹社さくひろ平のおす紀宦猪谷いとる
花咲ぬして年ふるものとへば秋の春
秋の色とりどりなるもあるもます

おりきん路に六十五文代人年十月二日戒檀
ゑ者道泉路よりよりて地下ゑ文郎とそふ
神ゑる事四文の恩信ゑ世ゑる事飢ゑ
二十四年今や小春ゑすつ花山茶ゆく
綻び水仙ゑさらす春はゑ花をおてゆめ人ゑ
身内をて却て地ゑ思ふむし伏て法師と
つゝいへる僧士あり花をおてをのゑうさ
し我待ゑ祝ゑる他ゑ定てゑ花ゑ
ゑゑ人ゑんゑと代て会ゑある人の夢

ゑ陽ゑふりあて文ゑ代ゑのゑある物ゑ
おゑ人ゑ紙に六の歌の水をゑ花ゑ甘つら
答ゑと我ゑ花ゑ代て文の人ゑ物ゑふ
くさあれゑとゑ花ゑ濃ゑみゑび風ゑ人
ゑ文ゑ物ゑ人ゑの義ゑ陽ゑとゑ
ゑ人ゑ陽ゑ代ゑ代ゑ答ゑ
ゑてゑさゑんゑとゑいゑゑ代ゑ信ゑ形ゑと
いゑのゑゑゑて代ゑ今ゑ耐ゑの恩ゑ
をゑゑゑふゑの代ゑ月のゑゑ友ゑをゑふ

百寒の風ないと云ふ陸奥の強月哉

抱き寄せて抱き寄せて抱き寄せられ

身もしとしとと一枝あり　あり秋彼岸の

ふちなくてむさとあぬ　あちこちの

時ら紅て梅ぬ　面の人こそ供養

南無喜光寺の弥陀佛と同音

唱へ来る

武江巣兆哀法書

福田村郷土資料館蔵書

中村俊定文庫

梅莊

旅の日の絵ようちは我蕪

尼寂まる法師の砂弦声　四村

偶人引ちら車に弦のきれて　巣兆

かそ京跡の古寺桃花　三巴

弦尾せる波てはあむ川の月　燕市

栗を刺きて杖と杉　史山

小相撲うらうらあてゝ月見　一雨

さのぼらるかるる古れ酒　葉蝶

四川八蔵雲ぬ我家のゝ月見て　斗月

三里八町る花股ぬ雨　北

あまら一分投出ぬやう　村

指を手ぶ子面螺むく新　市

撫さむ戸我育せてふさくらん　巴

雪ぬも月ぬ月ぬ月ぬ　雨

雪山我屋つと続る茶立　山

冬ぬかつら色令ぬ月　月

海を見る春ぬ眠さとも月　蝶

鶯の歌ぬ人あいの結　執筆

あらし吹き荒れ暮れかゝる
はしてかゝれるみなんと
脚力みなのゝ中にへるゝ
ふたゝび あもと秋ふかゝ
きくてふ ふれ立てむらひて
花ぬるのゝ

今よりは春もあるよりなり　咸美

題市中菴連句

新の月も清きめぐみを仰ひ　三巳

春人やまだ木ら残雪の友　葉竹
あるしも心て吹きを立て松　史山
雪ふれとろ〳〵松の動き来　雪雨

亡人を古形とふ国ある
さは追福あるる　沙

志ゝるや林香くま新人ゝろ　秋岡
新ふいそのまゝる春の垣　李喬

柳絮飛て別荘をたはつるかな　東子

牛込より柿の果を名残哉　斗月

一盃ふ飲ん下戸として三月

宴伐いとをたそのの風景

今もなほ名ちて

名残秋深るる俳優俳句　陳梅

ありとしたる蕎麦て投度　燕市

時雨茶もむらなぬ小さうつき　一豆

雲中に筆を遣ふ

雪毎に須臾なる窓外　岡村

世を人の是よも残りぬ孤火楠　有圭

以上捻香之施主以下者　治

百萬遍之唱衆也　祝

山風を奪ふて法木の葉哉　柳翠

秋一紀移りさみーみて市ち　春草

世を人とゆメてや張る圓　松丈

会俳の発句をそこなひ侍りぬ　淋山

俳句文学を学びけるうち　土蟬

雪ぬぎは馬士のいきうや丹波路　氷純

冠者のたぶさも匂ひや冬木立　其梅

かぶら売の迅丹波なるその里人の

追善なるべし　記

菜の花や捨てさみだれ紀寧伽の桶　雨柳

菜のもとよりめるとちり墓守　白圭

法会ぬはるいらめして

菜の花をまきちらして散る雪の　若人

垣根まで鹿のまねする秋の大事　竹司

けふ俳句後鳥羽の御の序ゆえ

聲聞の尊師と崇

願以至功徳

月代尼ぬとて小出たや寒会俳　巣北

文化八年霜月二日
秋香菴社友面向

東都　廣井秀俄藏板

昭和十四年八月三百部了
池上氏寫本より寫す　俊造